

## 意見

岩田 靖夫

今回の「神なき神」というテーマのシンポジウムは、現代の精神的状況と正面から取り組んでいて、とても面白かった。お三人のご発表はみな興味深かったが、ここでは特にリーゼンフーバー先生の発表に関説して二三の感想を述べてみたい。先生は、神に関するアンセルムスの考察が「理性のみによって (sola ratione)」遂行されていることを強調された、と筆者は理解した。理性はすべての人間のうちにあり、信じている者にとっても信じていない者にとっても、真偽の審判者である。理性は自分自身以外には、なにものをも前提としない。そうだとすれば、理性こそあらゆる人間にとって共通の普遍的原理を立てうるのではないか。筆者はそういう期待を抱かせられた。

今や誰でも言うように、現代は多文化多宗教の共存の時代である。宗教戦争が人類の犯した、また犯しつつある最大の愚行の一つであることを、否定する者はいないだろう。そういう意味では、他を全面的に否定するような自己絶対化は最早認められないだろう。では、どうしたら共存が可能になるのか。それは、恐らく、各宗教が共有する普遍的な共通項を重視することによってではなかろうか。では、そのような共通項はどのようにして見出されるのだろうか。一つには、経験的に各宗教を学び、研究し、類似の点を発見することが大切であろう。たとえば、仏教の教える慈悲とキリスト教の教える愛とは極めて近いであろう。しかし、こういうアポステリオリな道とは別に、「理性のみによって」という道もある、ということに改めて気づかされた。それは、恐らく、存在、真理、善というような根本概念に関する純粋に哲学的な探究がどのような帰結をもたらすか、という道かもしれない。現代では、存在と真理に関しては、ハイデガーが、善に関しては、レヴィナスが道なき道を歩んでいる。こういう思索が、あるいは、さらに恐ろしい強烈的な思索が、将来の宗教の共存に普遍的な土台を準備しうるかどうか、そういうことを考えさせられた。もちろん、リーゼンフーバー先生はこのような感想に賛成はされないだろう。「理性のみによって」といっても、その理性は無前提ではなく、キリスト教に固有の前提を含んでいるであろう。その理性は、『ヨハネ福音書』のロゴスかもしれない。しかし、いずれにしても、人類に普遍的な前提を探求することが、現代では特に不可欠であることに変わりはない。